2026 年 1 月号（通巻 200 号）

山正ニュース

山正公式 LINE　友達募集中！
お得なキャンペーン情報はこちらより↓
株式会社 YAMASHO 山正
https://yamasho.style/

1　2026年は「協働の利」

新年明けましておめでとうございます。
令和 8 年の皆様方のご健勝とご多幸を祈念します。

戦後80年、昭和100年の2025年は、様々な物事が動き出す「種まき」がされた1年であったかと思われます。世界は、トランプ関税、トランプ外交に揺さぶられていますが、右往左往しながらも、新しい秩序が作られていく予感がします。日本初となる女性首相、高市政権が発足し、新しい連立政権が誕生しました。大衆迎合ではなく、将来に継続できる強い日本の復活への政策に期待です。経済は、徐々に金利のあるインフレへのシフトが進みつつあります。30年間のデフレ経済とは全く違う世界であり、高度成長期のインフレとも異なる、成熟社会におけるインフレ対応が必要になると思われます。今までの常識に囚われない、新しい社会が始まっていく期待もありますが、不安も入り混じっています。

令和7年は、「米騒動」に振り回された1年でした。令和6年度産の主食米の歩留まり不足や、ふるい下米の不足によるコメの在庫減から始まり、コメ価格の上昇、農水大臣の交代、備蓄米の放出、輸入米の増加等々、今までにないほどコメや農業に焦点があてられました。コメの適正価格は立場により変わりますが、価格の乱高下がなく、稲作農家が安心して経営できる範囲の適正価格で安定供給と適正在庫の確保が求められます。いずれにしても農家が減少していく時代、担い手農家が将来も安心して継続栽培できる方策に期待します。今年も長く暑い夏が10月まで続き、渇水の心配もありましたが、局地的には豪雨災害、爆弾低気圧や竜巻被害も発生しました。年々亜熱帯化、二季化している日本列島です。暑さ対策を考慮した、作物や品種選定、栽培時期や栽培方法、施肥設計や耐暑性資材の使用等々を真剣に考える時が来ていると思われます。

農薬業界は、出荷額3379億（106．4％）と微増でありました。水稲の作付面積の増加や、カメムシ・ヨトウ関連の殺虫剤が増加したものと思われます。しかしながら、当用期での欠品、品切れが相次ぎ、お客様にもご迷惑をおかけしました。本年はこのような事態が無い様にしたいものですが、現状の物流やメーカー様の製造計画から鑑みると、適期適量の供給には業界全体で取り組む必要があり、問題解決には時間がかかると思われます。今年は、ある程度の事前予測に基づき、在庫確保に努めますが、お客様にも出来るだけ早期の予約、早期の納品へのご協力をお願いします。

国内農業は、「みどりの食料システム戦略」が徐々に具現化されつつあります。今後の農政の基本となるべきもので、環境負荷低減が求められる中で、有機農業の取組、みどり認定制度、農業版 J クレジット、スマート農業など、様々な取組が進められています。山正としてもこれらの時代の流れをキャッチアップし、お客様への情報提供をはじめ、ご提案、商品・商材のご紹介を行っていきます。①山正オリジナルのバイオモンスター、ケミカルモンスター商品の開発と提供　②ドローンを活用したスマート農業支援　③オリジナル栽培システムである山正モンスターベリーシステムの提供　④カーボンクレジット・有機農業への取組支援　⑤水稲の契約栽培のご提案　⑥土壌診断、画像診断による栽培アドバイスの実施　⑦NEXYZ 様との提携によるハウス・装備品の提供　⑧イチゴプロジェクトによる観光農園事業への支援など、既存の資材（種子、肥料、農薬、ハウス）の供給だけでなく、それらを上手く使う技術の提供を行うことで、農家様の仕事が、「きつい、汚い、危険」の3K　ではなく、「効率的で、かっこよく、稼げる」3K 農業を、進化させ、深化させ、真価を勝ち得るよう、山正としてご支援していきます。

今年のキーワードは**「協働の利」**です。
一緒に働く仲間との協働で企業風土を良くすることは勿論、仕入先の皆様や、お客様との協働により、各々の立場で出来ることを持ち寄り、知恵を出し合い、協力、支援することで、現場の課題を一つ一つ解決し、皆でその利を分かち合う仕事をしていきます。皆様の引き続き、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

2026年1月
株式会社　山正
代表取締役　堅田充宏

(C) COPYRIGHT YAMASHO CORPORATION. ALL RIGHTS RESERVED.

2 第11回「飛騨農の会」を開催

2025 年 11 月 12 日(水)、高山市のマウントエースにおいて、第11回の「飛騨農の会」を開催いたしました。農薬・肥料・資材メーカー45社に出展いただき、400名を超えるお客様にご来場いただきました。

今年度も昨年に引き続き、長く暑い猛暑であったことから、暑さ対策資材の紹介を多くさせてもらいました。熱中症対策の冷感ウエアなど作業環境を改善する用品の紹介や、バイオスティミュラント資材や微生物資材などの環境ストレス緩和をテーマとした商品を展示しました。また、トマトの選果機をはじめ、DONKEY のスマート農業ロボットの実演展示を行い、ご来場の皆様に機械による省力化を体験していただきました。新規出展メーカーでは、丸山製作所のウルトラファインバブルを瞬時に発生させる MUFB ウルトラポンプの紹介や、Jクレジットも活用できる TOWING の土づくり資材「宙炭(そらたん)」など、新しい技術や商品の提案がされ関心を集めていました。

まだまだ不十分な点もありますが、来年以降も皆様の営農・経営に役立てられるよう、より良い展示会を開催できるよう精進させていただきます。ご来場いただいた皆様、ご協力いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

3 25年度産稲作・作況単収指数“102”

2025年産の稲作について、農林水産省は、従来の「作況指数」が生産現場の実感とのずれを指摘されていたため公表を廃止し、新たに「作況単収指数」という指標を導入しました。「作況単収指数」は、過去5年間のうち収穫量が、最も多かった年と少なかった年を除いた3年間の平均と比較して算出されます。

25年10月の農水省からの発表では、令和7年度産主食用米収穫量は、前年に比べ63万4千トン増加の715万3000tと見込まれ、平成29年以来最高となっています。25年度産水稲の作付面積も、備蓄米・加工用米・新規需要米等の作付面積を除いた主食用作付面積が136万7000ha で、前年産に比べ10万8000ha 増加が見込まれることに加え、10a当たりの予想収量も、全国的に天候に見込まれたこともあり、534kgと前年に比べ5kg増加が見込まれているためであります。このような背景も踏まえ、2025年度産の「作況単収指数」は“102”との発表がありました。また、水稲うるち玄米の1等米比率は、9月末時点での全国平均は77.0%で、24年産の同時点(77.5%)から 0.5ポイント減少したものの、平年並みとなりました。1 等米は、品質検査基準をクリアした最高等級のお米で、①整粒(形が整った米粒)が70%以上を占める、②着色粒や異物などの混入がほとんどない、③水分量が15. 0%以下、と定められています。東北地方は94. 1%と前年から上昇、北陸地方は80. 1%と前年から低下しましたが、高水準を保っています。(右表参考)

今年の作柄では、高温や渇水などの影響は一部で見られたものの、比率を大きく下げる要因にはならず、また近年増加しているイネカメムシの被害懸念もありましたが、どちらも生産現場の対策が奏功し、全体として例年並みの品質となりました。

等級別検査数量
水稲うるち玄米　一部抜粋

府県名	2025年度(%)	前年比(ポイント)
新潟	75.8	▲ 8.2
秋田	94.5	2.5
山形	95.0	0
静岡	72.9	17,6
富山	87.0	▲ 4.1
石川	88.7	▲ 1.5
福井	86.2	▲ 4.0
岐阜	36.9	2.3
愛知	20.7	▲ 1.0
三重	25.7	▲ 0.8
滋賀	61.1	▲ 24.1
京都	71.0	▲ 5.6
全国	77	▲ 0.5

(C) COPYRIGHT YAMASHO CORPORATION. ALL RIGHTS RESERVED.